

数字や資料の背景にあるもの

校長 早坂重行

先日は、本校同窓会会長佐藤一郎先生による創立記念日の講演がありました。一郎先生の深遠な学術の世界に魅入られた生徒のみなさんも多かったことと思います。

同窓会事務局長の横山先生から来年の創立記念日の講演の候補者の推薦を依頼されたので、以前本校に勤めていた時に担任をした小丸陽平君（高58回）と菅澤康平君（高58回）を紹介させていただきました。小丸君は東大の理Ⅲ、菅澤君は東大の文Ⅰとともに現役で進学し、現在小丸君は東大病院、菅澤君は東京の弁護士事務所で、勤務・活躍され、二人とも将来をととても嘱望されています。



また、二人の講演のプロデュースを同級生の樋口裕二君（高58回）にお願いする予定でいます。樋口君は、二高から武蔵野美術大学に進み、現在大手広告代理店の「電通」で活躍されております。

さて、彼らがそれぞれの世界で活躍できているのは、東大や有名美術大学に合格できたからでしょうか？ もちろん、それも大事なことだと言えますが、それだけではないと思います。彼らが、大学入学後、学問を深め、そして社会に出て第一線で活躍しているのは、非認知的能力の観点から考えると、高校、大学での学びで身につけた「自己肯定感」、「自己調整力」、「レジリエンス」などに優れているからではないでしょうか。

例えば、「自己調整力」とは、「学習者たちが自分たちの目標を達成するために、体系的に方向づけられた認知、感情、行動を自分で始め続ける諸過程のことである」（ジーマーマン他、2014）とされています。具体的には、「与えられた興味・関心でやる気のある段階から一歩進んで、粘り強く、主体的に学ぶ力です。学習目標を立てて、やる気がない時にでもやる気を出す方略を身につけることや、小さい目標の達成を繰り返して自分を鼓舞する」（溝上慎一、2024）能力です。上記の先輩方は、本校で高校までの高い「自己調整力」を身につけていて、大学入学後さらにそれをブラッシュアップしていったことが推察されます。

前述の小丸君が授業の後に、多くの先生方に質問をして、議論し、学びを深めていたこと、それを周りの同級生が興味深く聞いていたことを思い出します。そういう二高生のみなさんとの学び合いの中で、私自身も学びを深める必要性を認識し、勤務しながら大学院の博士課程で学ぶことを志しました。

受験は結果だけではありません。仙台二高の進路指導の目標として「第一志望を貫く」と言うことがあります。「第一志望を貫く」ことを通して、文武一道のもと、本校での学び合いで上記の力を深めていくことが大事だと考えます。この進路の手引きは数字や資料が中心に示されていますが、数字や資料の背景にあるものを意識しながら読むと、より有益なものになるのではないのでしょうか。二高生のみなさんの本校での学びに大いに期待します。

参考 B.J. ジーマーマン, D.H. シャンク編, 塚野州一, 伊藤崇達 (2014) 「自己調整学習ハンドブック」北王子書房
溝上慎一 (2024) 教育の森「毎日新聞」